

馬場記念公園観察会のまとめ（室内研修）

日 時 令和3年8月7日（土） 13:30～14:30
開催場所 富山市立奥田公民館
担 当 佐伯肇

7月10日の観察会は、一般参加者含めて15名の参加者がありました。参加された方々の向学心が新鮮でした。馬場記念公園は大正時代馬場はる氏からの寄付を受けた旧制富山高校が1962年廃止、跡地を公園として開放し、今に至ります。樹木はほぼ完全に人に手によって植えられていました。山にある樹木は自然淘汰されたもので、人との関わりがあまりありません。しかし、公園に植えられた樹木は、ほぼ100%人と公園の環境と関わりがあります。

室内研修では、観察会のおさらいと樹木に関連する次のエピソードを説明しました。

「サンゴジュと防災」、「サンゴジュとダニ」、「マサキ、マユミ、ニシキギ」、「イチョウの精子、♂♀識別」、「イチョウとアンチエイジング」、「イチョウと恐竜」、「プラタナスとスズカケノキ」、「プラタナスの歴史」、「ケヤキの自己剪定」、「アカシア、ニセアカシア、ハリエンジュ?」、「サワラ、ヒノキ、アスナロ、ネズコの違い」、「ウラジロモミ、ツガ、モミ」、「ヒイラギ人生、サクラ切る馬鹿」、「ウメ切らぬ馬鹿」、「マツの運命」、「タブノキとアボガド」、「ヤシ、ソテツ、シュロ」、「ソテツ地獄」、「ジャガイモとソラニン」、「モロヘイヤとムチン」、「ウメとウイルス」、「ウメはサクラに勝る?」、「梅、桃、桜の見分け方」、「松竹梅」、「シラカシが目覚めます」、「シラカシとウラジロガシの見分け方」、「シラカシの花」、「公園管理と樹木」、「100年の森」、「モクゲンジ」。

主なものを紹介します。

「タブノキとアボガド」

タブノキってブロッコリーみたいな樹形ですね。タブノキは同科のクスノキと同様高木になりますが、横に枝が広がってこんもりしたシルエットになることも有ります。





下見した時、側溝に直径 1 cm ほどの偏球形で緑色の実がごろごろ落ちていました。割ると、中から大きな種と薄い黄緑色の果肉が顔を出しました。実はタブノキは資料によっては「クスノキ科アボカド属（ワニナシ属）」とされることもあり、アボカドと近縁種なのです。そのため

果実のようすもごく小さいながらアボカドに似ています。

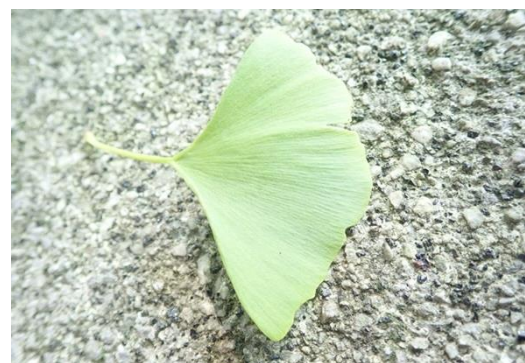


アボカドはそのまま食べたり、料理に利用されたりします。サラダやパスタ、丼ぶりなどさまざまな方法で食べられています。アボカドは栄養が豊富に含まれています。

アボカドは南米の山奥で山奥の農園でプランテーション栽培・加工されています。収穫までに必要な水は非常に多く、1 キロあたり約 2 0 0 0 リットルと、トマトの 1 0 倍という試算もあり、地域によっては農園周辺で生活用水不足が発生しているそうです。そのため果実が土壌の養分を吸い上げ、土地が痩せたり、農地を広げるための森林伐採により野生動物が生息地域を追われたりしていることだそうです。私が以前調べた「パームヤシ」もそうですね。アボカドに限らず、私たち消費者は無意識に買ったり食べたり飲んだりするのが普通になっていますが、これだけ環境問題が注目される時代なので、いかに取捨選択していくかが問われるようになると思います。

「イチョウの精子、♂♀識別」

イチョウの雄雌を確認する方法は巷でいろいろいわれていますが、あまりあてにならないようです。ここで確実に見分ける方法を紹介します。落葉した時に短枝を見る方法です。左の写真が雄木。右の写真が雌木。芽の先端のふくらみ方が違います。芽の中に花粉を出す雄花穂



（ゆうかけい）が幼葉とともに入っている雄木の芽はふくらんでいて、ちいさな雌花穂（しかけい）と幼葉が入っている芽は小さくて、少し尖っています。この芽で見比べる方法は、常に剪定されている街路樹ではわかりません。公園や寺社仏閣に植えられている個体で、成熟した枝が見えることが条件です。



「アカシア、ニセアカシア、ハリエンジュ？」

明治期に日本に輸入された当初は、**ニセアカシア**を**アカシア**と呼んでいました。その後、本来のアカシア（ネムノキ亜科アカシア属）の仲間が日本に輸入されるようになり、区別するためにニセアカシアと呼ぶようになりました。しかし、今でも混同されることが多いです。本来のアカシアの花は放射相称の形状で黄色く、ニセアカシアの白い蝶形花とは全く異なります。

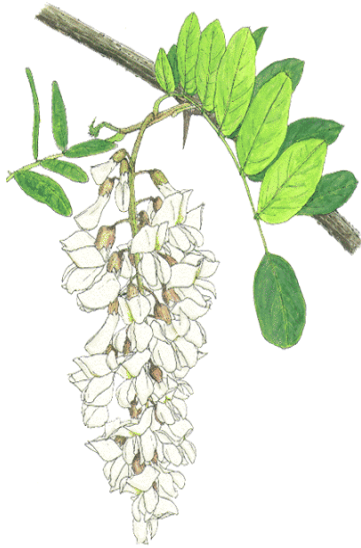


次のものはすべてニセアカシアです。

- 札幌のアカシア並木
- アカシア蜂蜜として売られているもの
- 西田佐知子のヒット曲「アカシアの雨がやむとき」に歌われる「アカシア」
- 石原裕次郎のヒット曲「赤いハンカチ」に歌われる「アカシアの花」
- 北原白秋の「この道」に歌われる「あかしやの花」
- 松任谷由実の「acacia[アカシア]」（2000年代）



ニセアカシアが侵入したことで、アカマツやクロマツなどのマツ林、ヤナギ林が減少し、海岸域や溪畔域の景観構造を大きく改変させていることが確認されています。



ニセアカシアは単独で木本の生物多様性を低下させるだけでなく、好窒素性草本やつる植物をともなうて優占し、植生を独自の構成に変えてしまいます。これを危惧し、日本生態学会は本種を日本の侵略的外来種ワースト100に、選定しました。日本では外来生物法の「要注意外来生物リスト」において、「別途総合的な検討を進める緑化植物」の一つに指定されています。こんなふうに、名前以外のことをからめて覚えると忘れませんよ。標準和名「ハリエンジュ」で覚えてください。

「モクゲンジ」

私は最近までモクゲンジを知りませんでした。富山きときと空港の正面直線道路の街路樹が立ち枯れている問題を取組んでいる樹木医富山県支部の事業に参加して、初めて知りました。

モクゲンジはムクロジ科で主に本州の日本海側、朝鮮、中国に分布。寺院によく植えられていて、国内のものは本来の自生かどうかは分かっていないそうです。果実は風船のように膨らみ、熟すと3裂してホオズキみたいです。名前の由来はムクロジの中国名「木患子」を誤ってモクゲンジにあてたため、その日本語読み「モクゲンジ」になったと言われている。また、木の葉の様子がセンダンという植物の葉に似ていることから、「センダン葉の菩提樹」とも呼ばれています。



41号線に延びる直線道路の街路樹としてモクゲンジが植えられています。1963年富山空港開港に際し、当時中沖知事が当時の富山大学長井真隆先生に相談したところモクゲンジが良いとのことで植樹されたそうです。現在その大半がツヤハダゴマダラカミキリの食害で枯れていました。

長井先生は北日本ナチュラリスト講座の講師です。そのモクゲンジが馬場記念公園にありました。



空港前の枯れたモクゲンジ



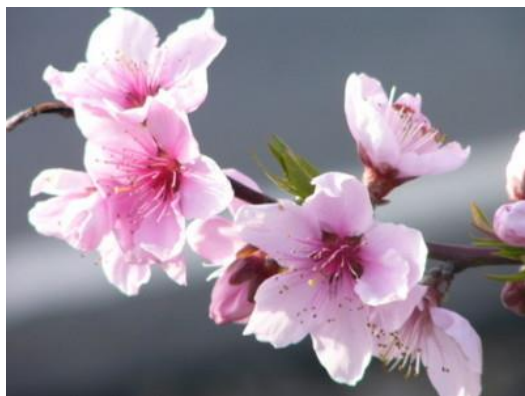
空港前街路樹のモクゲンジにおける成虫の産卵加工（2021.8.9）。この画像は木材研究所桐山研究員の撮影によるものです。

「梅、桃、桜の見分け方」



梅

花柄（かへい）がないので、枝にくっつくように花が咲く。花芽が1節につき1個なので、たわわに咲くのではなくスカスカした感じ。花びらの先が丸い。花言葉：上品、高潔、忠実、忍耐。



モモ

花柄がひじょうに短いので、枝に沿うように花が咲く。節の中央に葉芽があり、その両側に花芽が1個（つまり1節につき2個）なので、梅よりも華やかに見える。花びらの先が尖っている。花言葉：気立ての良さ、チャーミング、私はあなたのとりこ、長寿



サクラ

花柄がひじょうに長いので、枝からこぼれんばかりに花が咲く。花芽が房状に付いているので、花数が多くとても華やか。花びらの先が割れている。花言葉：精神美、優美な女性、純潔。

「100年の森」

公園をつくった時、だれがどのように植えると決めたのか？

馬場記念公園は、大正時代馬場はる氏からの寄付を受けた旧制富山高校が1962年廃止、跡地を公園として開放されたものです。おそらく当時の学校にあった樹木に、市民が集える樹木を植栽されたものと思われます。

1本の木が生えていると、なぜまわりに草が生えるのでしょうか？木が1本生えていると、幹のまわりには人が踏まない空間ができ、風に運ばれてきたタネから草や木が生えてきます。人が踏まない土は硬く締まらないので、草や木のタネが発芽しやすくなるためです。鳥が枝で休んで糞をすると、木や草が生えます。鳥がついばんだ実に入っていたタネが、消化されずに糞となって落ちるからです。木や草に虫が寄ってきます。虫は捕食する虫を呼び、虫は鳥の餌になります。こうして木の成長にともなって小さな生態系ができてくるのです。このように、生き物は命をつなぐためにさまざまな方法で広がりを作ります。

人が作った公園でもこれらの変化があります。公園の境界はありますが、生き物は自由に出入りします。そして、公園は人間が自由に入ることができます。身近な山林、里山は人が入って人と関わりがありますが、公園は人の思考、法律で管理されますが里山に劣らず自然の変化が繰り返されています。温暖で降水量が多い日本、とりわけ富山県の自然の変化は顕著で、面白い。

明治神宮100年の森と馬場記念公園の森

2015年1月に、NHKで明治神宮の特集がありました。明治神宮は100年かけて明治神宮は1920年、創建されました。その神宮の森は、自然の森ではなくて100年前、荒野に作られた人工の森だったので、彼らが目指したのは、永遠の森。元々この地にあった太古の原生林でした。数千年前、人の手が加わる前



の東京には、一年中葉を落とすことのないシイやカシなどの常緑広葉樹の森が広がっていました。うっそうとした原生林の中では、ドングリから常に若い木が育ち、森は途絶えることなく世代交代を繰り返していました。彼らはそんな永遠に続く森を理想としたのです。



日本初の林学博士、公園の父と呼ばれる本多静六。その弟子の本郷高德と上原敬二。大隈重信に「総理、我々が計画している森は、藪ではありません。東京に一番適した広葉樹の森です。東京の土地には、杉には向いていません。」と談判しました。そして日本全国から集まった樹

木は10万本に達しました。放送は100年経過した森の状態を調査したものです。土壌生物班、昆虫班、樹木調査班、水性生物班、哺乳類班等の調査が行われたもので、興味深い番組でした。



さて馬場記念公園の話。私には、植物が生き残るための強烈な戦いを続けている、真っ只中の戦場に見えます。植物相は、雑草地から陽樹林へ、陽樹林から陰樹林へと方向性を持ってダイナミックに変化していきます。また構成員の総入れ替えが大小問わず何度も起こります。公園化直前の馬場記念公園は学校であったため、自然度は極めて低いといえます。しかし、公園に植えられた常緑広葉樹を自然状態で生長させておけば、自ずと自然度の高い森林になっていきます。その結果として外からの帰化植物は排除されていきます。今後、世界との交流が益々盛んになり、多くの外国産の植物が富山に渡ってくるでしょう。また、たくさんの人々が公園に出入りし、それに伴って、招かざる植物が侵入してくるでしょう。安全重視される都市公園では、人を守るための法律が、どん



どん具体化されて行かざるを得ません。公園の若い常緑樹林は、将来、これを拒む力をつけていけるのでしょうか。馬場記念公園は、明治神宮と同じく「100年を見据えた公園」になるのでしょうか。

参加者：（敬称略・順不同）会員10名 ＊非会員なし 計10名
塩見敏子、小川聚一、牧野まち子、佐生光子、稲垣由佳子、寺林泰治、下条律子、黒田愛子、吉野均、佐伯肇

（記録）佐伯